

9.子ども食堂が大人と子どもの居場所になるためには：  
子ども食堂への定着率の増加と新規の参加者を増やすために

芝田悠人

1.はじめに

子ども食堂とは、厚生労働省の定義では、地域のボランティアが子どもたちに対し、無料または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供する場所であるとされている。本稿では、温かな団らんを提供する場所という定義に着目して、愛知の子ども食堂は地域の居場所になりえているのかを明らかにしたい。また、子ども食堂が大人と子どもの居場所になるためには、リピーターの確保と新規の参加者を増やすことが重要なことだと思い、それについて調査した結果を報告する。

2.居場所について

まず居場所とは何かであるが、居場所は子どもたちに以下の三つのものを提供しているものであると定義する。

一つめは「栄養や知識」である。子ども食堂であればカロリーやビタミンといった栄養、学習支援であれば漢字や算数の知識、これだけなら無料や低額で提供されること以外は、街なかの定食屋や進学塾と変わらない。

二つめは「体験」である。友だちと一緒に食べる、一緒に遊ぶ、野球にサッカーにボードゲーム、川辺のバーベキュー、海や山へのキャンプ、田植えなどである。「ふつう」の子どもたちが親から与えてもらっている体験が不足または欠如している子どもたちに、団体や地域が提供する。体験は「特別な体験」に限らない。「みんなで鍋をつつく」という、多くの人にとっては特別ではない体験が、ある子には特別な体験となることもある。

三つめは「時間」である。自分に関わり、自分を見て、自分に声をかけて、自分の話を聞いてくれる時間、この時間が、つながりを生み、居場所の外にもつながりを拡散していく。

この三つのなかでもっとも重要なものは「時間」である。三つとも重要だが、中でもとりわけ重要で、にもかかわらず十分に意識化・言語化されていないものがあるとするならば、三つめの「時間」である。「時間」は、居場所の居場所たるゆえん、居場所の核を形成している。子どもには、かまってもらふ時間が必要だ。話しかけたりすることで、子どもたちは社会性や常識を身につけ、語彙を増やし、物事の見方や考え方を学んでいく。そこに十分な時間がかけられたとき、その相手やそこにあるモノ、それを包む空間は、その子になじみ、構えなくてよくなり、自分が自分でいられるようになる。その空間が居場所である。そこで、本稿も「時間」に着目して、開催頻度が多ければ多いほど地域の居場所となっていると考えた。

3.調査方法

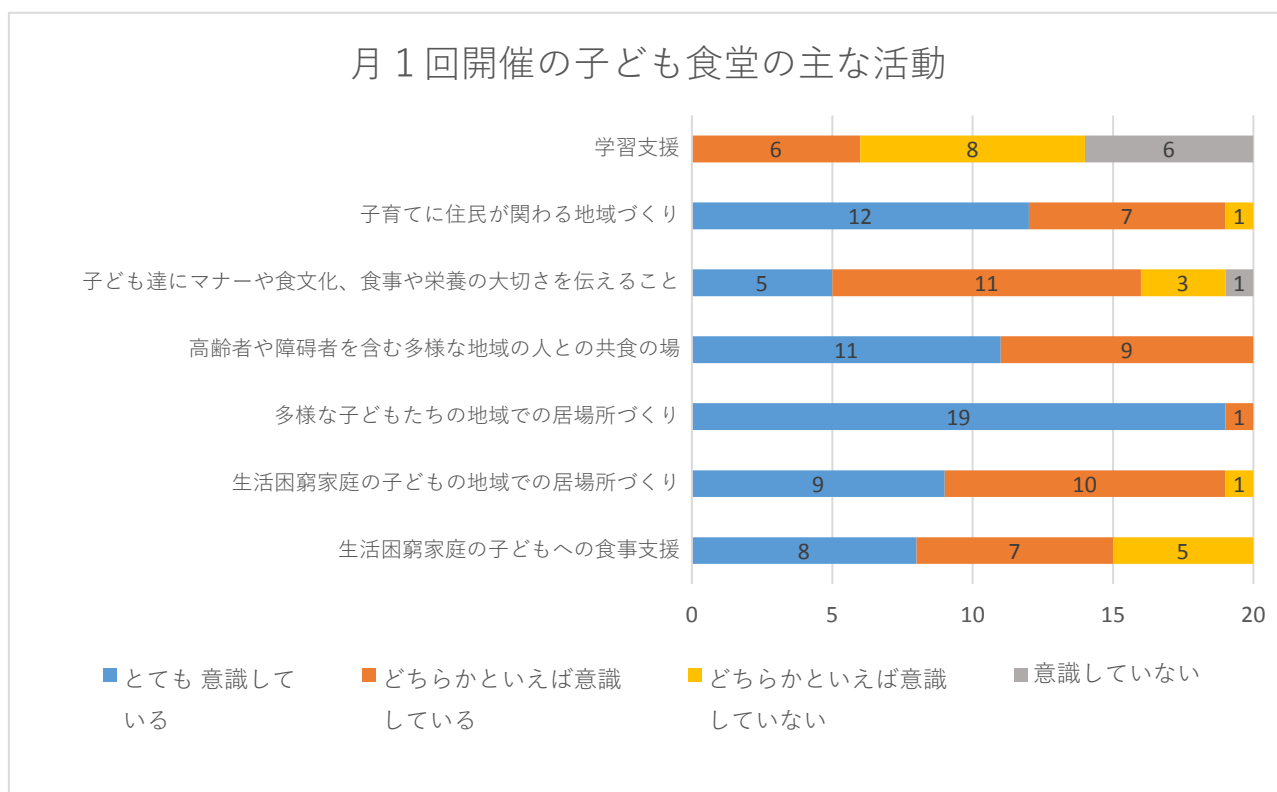
調査方法としては、まずはじめに、①開催頻度によって主催者の子ども食堂を開く目的が違うのではないかと、②子ども食堂の開催頻度と参加人数は関連があるのではないかと、この二つの仮説を明らかにしていきながら、子ども食堂は地域の居場所になっているかを知るために定着率を調べる。次に、その定着率を上げるために、利用者の求めている子ども

食堂を明らかにする。さらに、新規の利用者を増やすため、利用者がどのように子ども食堂を知ったのかを調査し、その結果から子ども食堂側はどのようにしたら新規の利用者が増えるのかを分析していく。

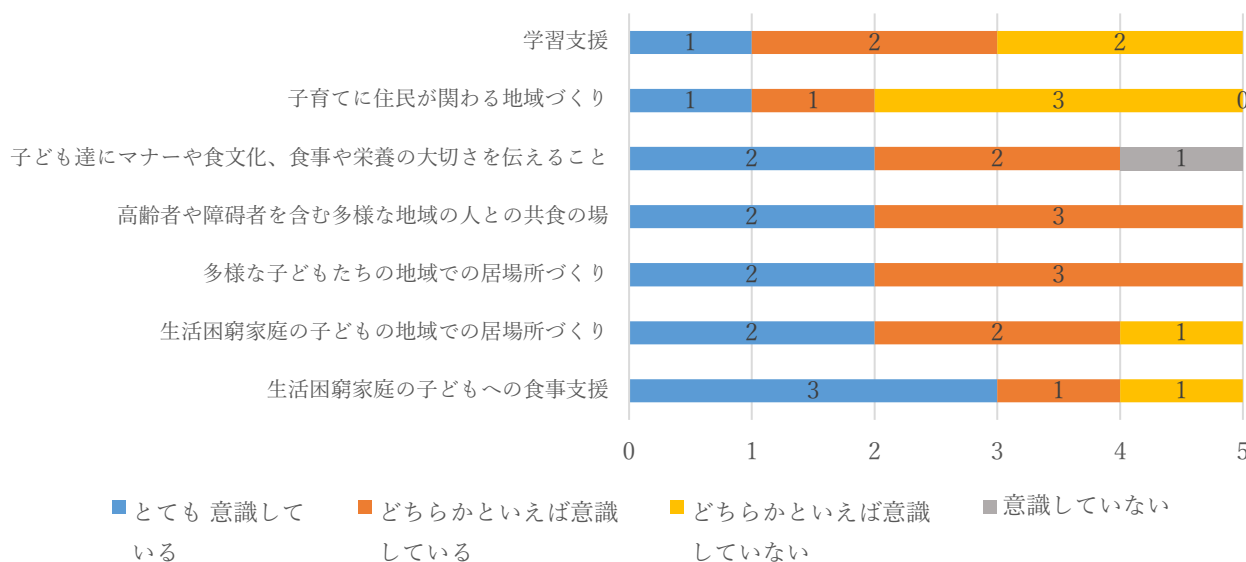
本調査では、愛知県内及び名古屋市内の子ども食堂 24 か所の運営者と大人の利用者、子どもの利用者に分けてアンケート調査を行った。本稿では運営者アンケートの Q2、Q12、Q18 と大人の利用者アンケートの Q4、Q6、Q12 子ども利用者アンケートの Q1、Q2、Q3 を利用していく。

#### 4. 仮説に対する調査結果

一つめの仮説は、「開催頻度によって主催者の子ども食堂を開く目的が違うのではないか」である。この仮説では運営者アンケートの Q18 を使用する。運営者アンケートの Q18 の結果を子ども食堂の開催頻度が月 1 回と月 2 回以上に分けた結果が以下のグラフだ。

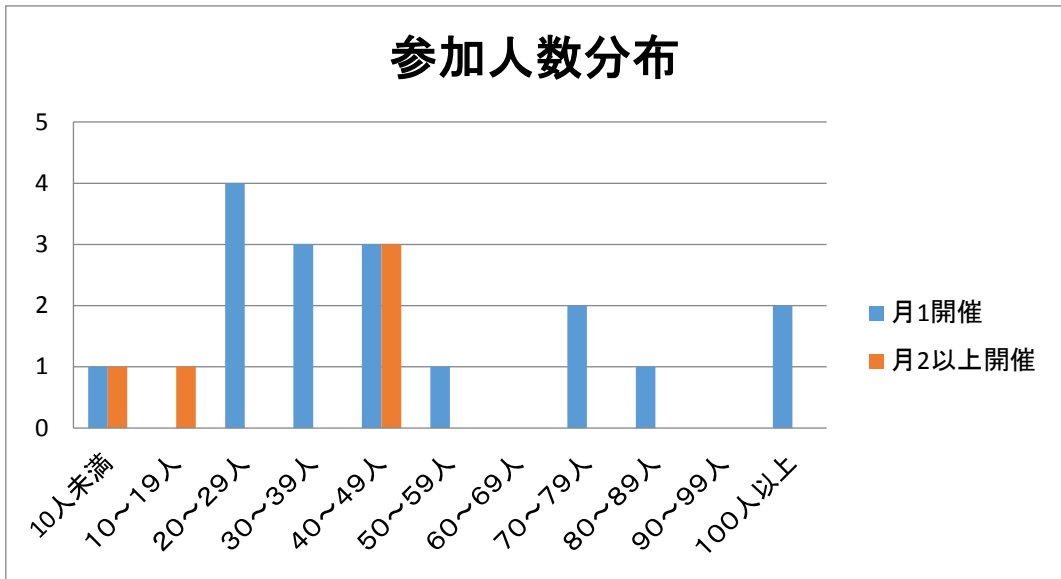


## 月2回以上開催の子ども食堂の主な活動



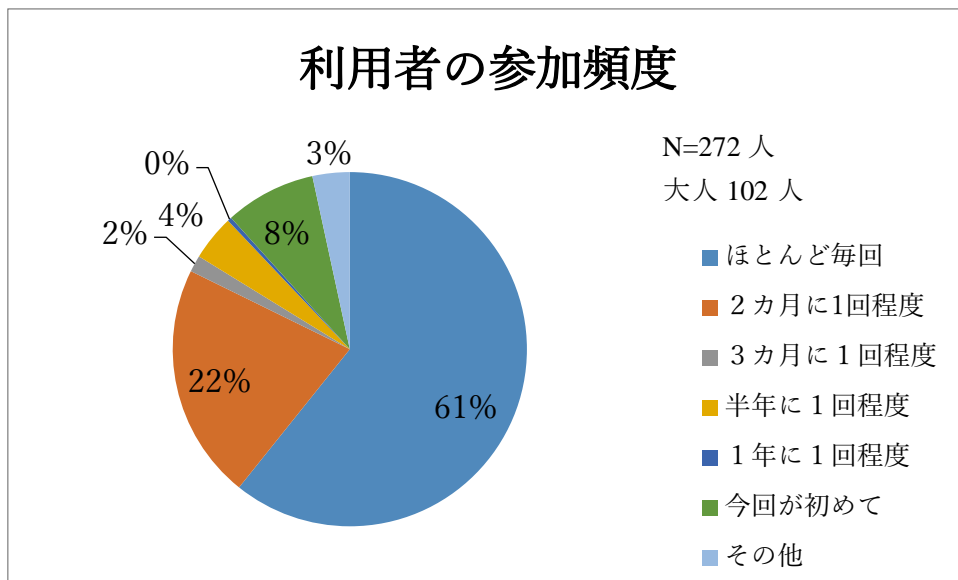
このグラフからは開催頻度によって主催者の子ども食堂を開く目的が違うのではないかとはいえないということがわかる。ここでもデータが多くないため明確には言えないが、生活困窮家庭の子どもはもちろんのこと、多様な子どもたちの居場所作りをどの子ども食堂も目的としているようだ。また、多様な地域の人との共食の場の提供という項目では、回答していただいた子ども食堂はみな「どちらかといえば意識している」を選択していて、地域に密着していこうというのが伺える。子ども食堂を長く続けるためには地域の方々の支えは必要不可欠だと考える。北九州市立大の稲月正教授（社会学）は「公的支援や民間の寄付も含め、子ども食堂自体が経済的に自立することが欠かせない」と企業や地域住民の理解の重要性を挙げている。

二つめの仮説は、「子ども食堂の開催頻度と参加人数は関係があるのではないか」である。この仮説では運営者アンケートのこれまでの1回あたりの参加人数（スタッフを除く）を、開催頻度が月1回か月2回以上かで分けた棒グラフを利用する。そして結果より仮説は正しいか否かを分析しさらに地域に定着しているかを調査する。運営者アンケートの開催頻度、これまでの1回あたりの参加人数（スタッフを除く）の結果は以下のようになっている。青の棒グラフが月1開催、オレンジ色が月2回以上開催している子ども食堂の数である



グラフから読み取れる通り 23 か所のデータだけでは子ども食堂の開催頻度と参加人数は関係がわからない。一番参加人数が多いところで 118 人であり、少ないところだと 7 人だった。

この結果からでは子ども食堂が地域に定着しているかわからないので、本稿では大人と子どもの利用者アンケートの子ども食堂への参加頻度を利用する。結果は以下の通りである。



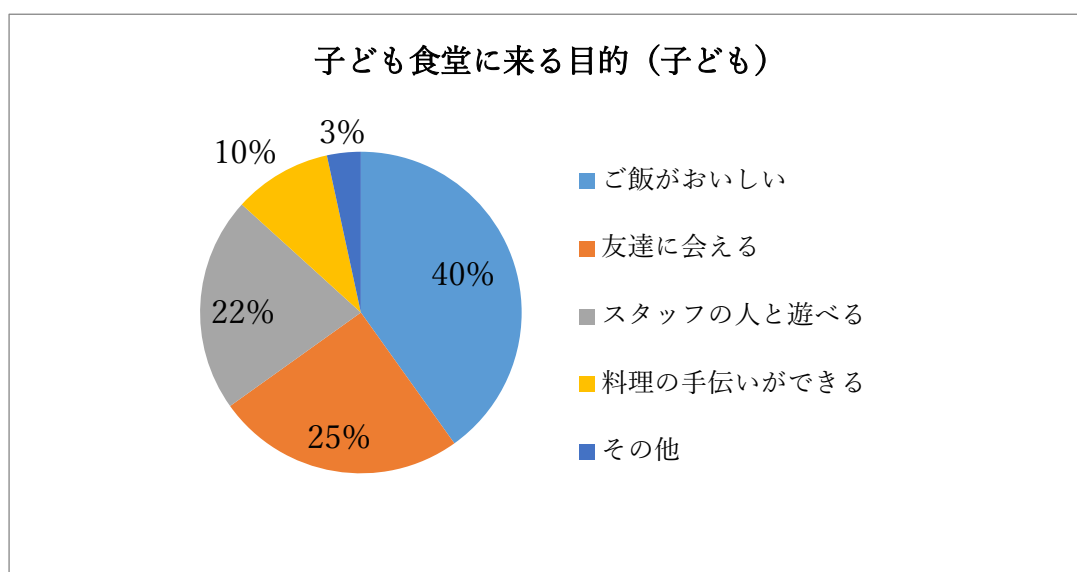
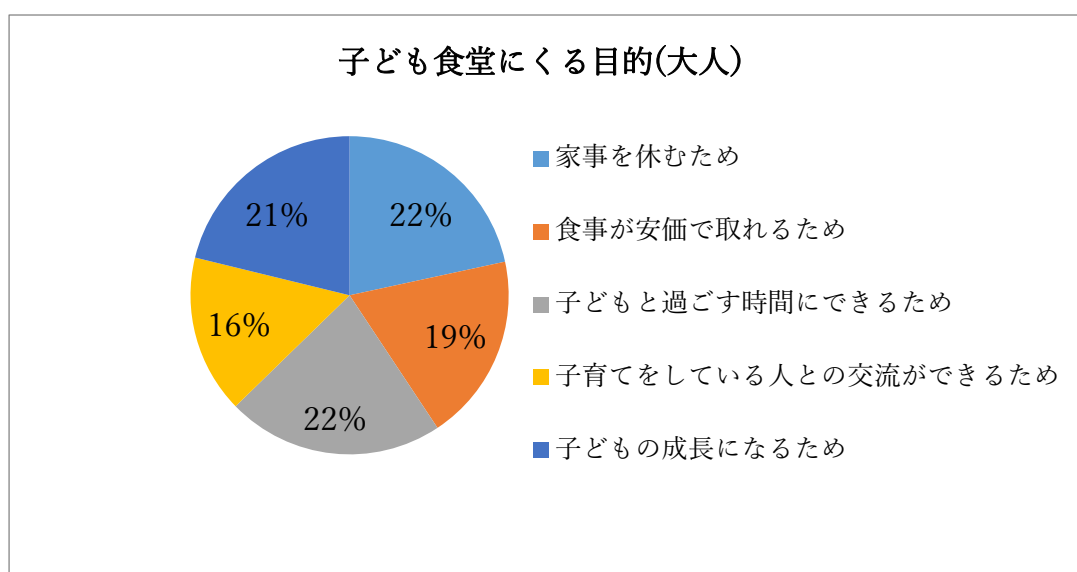
この結果から利用者全体の 61%がほとんど毎回参加しており、子ども食堂が地域にだんだんと定着していっていることがわかる。私が参加している子ども食堂も、この結果同様ほとんどの子が毎回参加している印象だ。毎回顔を合わせているとだんだんと仲が良くなっていき、話すことも多くなるので、その子にとって子ども食堂が居心地の良い場所になっているのかなと感じる。

開催頻度は参加者の大小、子ども食堂を開催する目的にも関係ないことが分かった。

開催頻度に関係なく一度子ども食堂に参加した方の半数以上は毎回参加してくれているので、地域の居場所になりえているのは分かった。

#### 5. 利用者の求めている子ども食堂

上記の利用者の参加頻度の調査で、61%が毎回参加しているという結果が出た。この結果だけでも十分子ども食堂が地域に定着していると感じるが、2カ月に1回程度参加していると回答している22%の利用者が毎回参加するようになっていけば定着率は8割を超える。そこで、本稿では定着率を上げるため、利用者がどのような目的で子ども食堂に参加しているかを知り、どのようなことをしたら定着率が上がるかを分析するために大人と子どもに分けて調査した。結果は以下のとおりである。

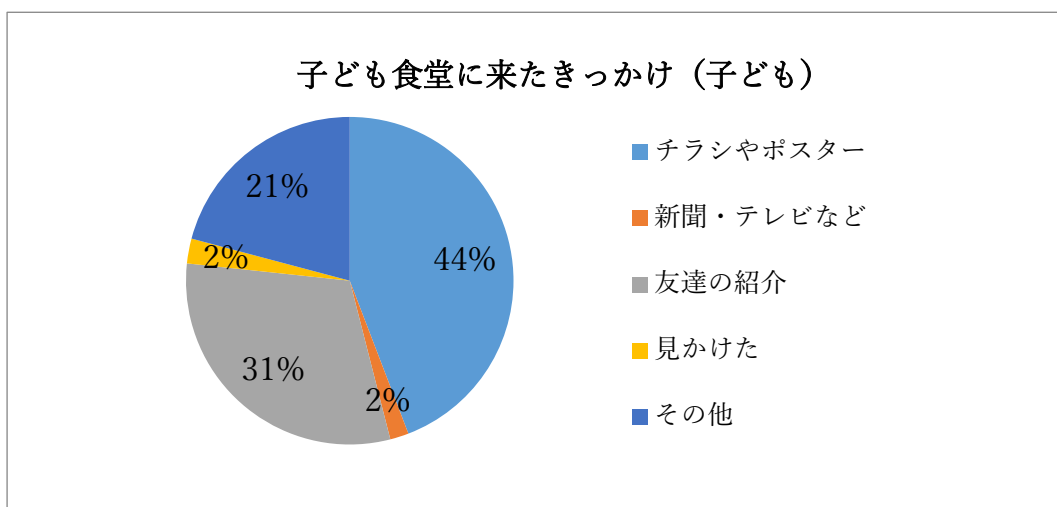
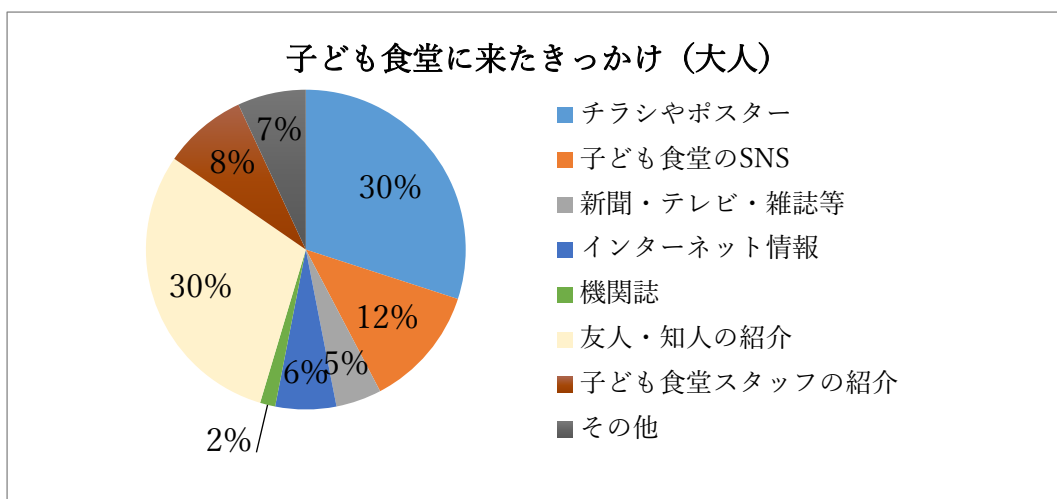


大人の子ども食堂にくる目的としては、子どもと接する時間を増やしたくて参加している方が多くみられる。子どもの目的としては、美味しいご飯を食べられるということが一

番の目的だ。あとは友達やスタッフの人と遊べるからという目的もデータの半数ちかくある。そのため、子ども食堂側はレクリエーションが無いところはレクリエーションの時間を作るとよいと思った。そうすれば、子どもは楽しく友達やスタッフの人と遊べて子どもの定着率は上がり、さらにレクリエーションで親と子どもが触れ合える企画を作るともっと大人の定着率があがるのではないだろうか。

## 6. 新規の参加者を増やすために

利用者の参加頻度の調査結果で61%が毎回参加しているという結果が出たが、初めて参加すると回答した人は全体の8%しかいなかった。この結果はよく言えば、定着率が高くとてもよいといえるが、悪く言えばまだまだ子ども食堂のことを知らない方がたくさんいるということではないか。そこで、本稿では利用者がどのように子ども食堂を知ったのかを知り、その結果から子ども食堂側はどのようにしたら新規の利用者が増えるのか分析していく。子ども食堂を知ったきっかけを大人と子供に分けて調査した結果は以下のとおりである。



大人が子ども食堂に来たきっかけは「チラシやポスター」と「友人・知人の紹介」がそれぞれ30%ずつで、全体の半数以上を占めていた。子どもが子ども食堂に来たきっかけで最も多いのは44%の「チラシやポスター」で、次が31%の「友達の紹介」である。この結果から大人も子どもも子ども食堂に来たきっかけは似ていることがわかり、子ども食堂側はチラシやポスターに力を入れることが重要だと感じた。チラシやポスターで子ども食堂を知ってもらえれば、大人も子どもも友人に紹介できてどんどん人から人へと繋がっていくのではないだろうか。

## 7. おわりに

本稿では子ども食堂が大人と子どもの居場所になるためにはリピーターの確保と新規の参加者を増やすことが重要なことだと思い調査してきた。子ども食堂が居場所になるためには利用者と接する時間が多い方がよいのではないかと考え、開催頻度の多い少ないで子ども食堂を開く目的と参加人数の関係性を調べたが関係性がわからなかった。

また、利用者の参加頻度の調査結果から利用者の定着率を上げるためにはどうすればよいのかも調査した。その結果レクリエーションの重要性に気がついた。だが、レクリエーションができるスペースがない子ども食堂はどうするのかという新しい問題がでてしまった。

さらに、新規の利用者が増やすにはどうすればよいのかを調査したところ、大人と子どもに分けて子ども食堂に来たきっかけを調査したがとても似た結果となった。ネット社会の世の中でチラシやポスターに力を入れることが重要だと知った時は驚いた。そして人と人とのつながりの重要性にも気がついた。

最後に、子ども食堂が居場所になりえているかどうかは今回の調査実施数ではまだまだわからないと感じた。圧倒的に調査実施数の少なさを感じた。もっと調査実施数を増やせば、関係性のわからなかった開催頻度の多い少ないで子ども食堂を開く目的と参加人数の関係性もわかることができるかもしれない。新規の利用者もまだ開催場所の立地面や開催する時間によって増えるのではないかといった残された課題が沢山ある。

## 参考文献

子ども食堂通知案 厚生労働省

<https://www.mhlw.go.jp/content/000306888.pdf#search=%27%E5%AD%90%E3%81%A9%E3%82%82%E9%A3%9F%E5%A0%82+%E5%8E%9A%E7%94%9F%E5%8A%B4%E5%83%8D%E7%9C%81%27>

子どもの貧困 「居場所」とは何か？ 居場所が提供するもの、そして問うもの

<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20170328-00069124/>

「子ども食堂」急増の陰に “大人の都合” で休止も 資金や人手不足 継続へ模索続く  
[https://www.nishinippon.co.jp/feature/tomorrow\\_to\\_children/article/405899/](https://www.nishinippon.co.jp/feature/tomorrow_to_children/article/405899/)